

教育実習事前アンケートの効果と検討について

内野成美（長崎大学大学院教育学研究科）

原田純治（長崎大学教育学部）

本研究の目的は、学生が教育実習を円滑に送ることができるための取り組みとして行っている事前の体調等に関するアンケート調査の取り組みの効果及び改善点の検討にある。

本研究では、アンケートの質問項目が「身体的訴え」と「心理的訴え」の2因子に分かれ身体的に訴えの多い学生ほど実習中に問題が生じる割合が高いことが示された。

キーワード：教育実習、事前アンケート、不安

1. 問題と目的

長崎大学教育学部では、平成20年度から教員免許取得を要件としないゼロ免課程を廃止し、高度な学識と豊かな人間性及び実践力を備えた専門的教育者を養成するための多様な実習を取り入れたコア・カリキュラムを推進している（図1）。教育実地研究としての実習は、1年生時の参加観察実習、2年生時のリーダー研修・野外体験実習を経て3年生時の教育実習へと至る。その他にも蓄積型体験学習として、離島実習、企業実習、学習支援実習などさまざまな実習が組み込まれているが、3年生時の教育実習は、いわばそれまでの自身の学びや体験の成果を具現化し、実習の中での反省点を踏まえ卒業までに更なる研鑽を積むための貴重な自己理解への気付きを得る機会となる。しかし、この実習において、最近課題となっているのが、余裕をなくし実習にうまく取り組めない、あるいは体調などの不調から実習中に中断を余儀なくされてしまう学生の存在である。

「事前に学生の実態を把握できていれば…」という実習校の要望もあり、現在は、学生に対し実習前に体調などに関するアンケートを行い、申し出などに従い、学生側の不調などについて実習校に伝えるようにしている。また、事前指導とは別に事前学習会を設けたり、大学教員による実習中のサポート参観システム（図2）を採用したりしている。これらは、学生にとっても実習校にとっても円滑な実習が送れることを願ってのことであるが、十分に機能しているとは言い難い。

本研究では、実習生へのサポートの一環として取り組まれている体調などのアンケートの妥当性と改善点の検討を行うことを目的とする。

2. 本学部の実習システム

(1) 本学部における教育実習の流れ

本学部では、図1に示すように1年時より参加観察実習等の実習がカリキュラムの中に組み込まれている。教育実習は「教育実践力の深化」を目指す3年時の実習として実施され、多くの3年生は9月に附属学校で主免実習を行うこととなっている。教育実習の際は、図2に示すように学部教員によるサポート参観システムが採用されている。

目指す力	学年	内容
教育実践力の発展	4年	蓄積型体験学習 離島実習，介護等実習
教育実践力の深化	3年	<div style="border: 1px dashed black; padding: 5px; display: inline-block;">教育実習</div> 野外体験実習 ・リーダー研修 参加観察実習 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; display: inline-block;">教育実地研究</div>
教育実践力の基礎	2年	
教育の基礎 子どもの理解	1年	

図1 各学年の目指す力と実施される実習

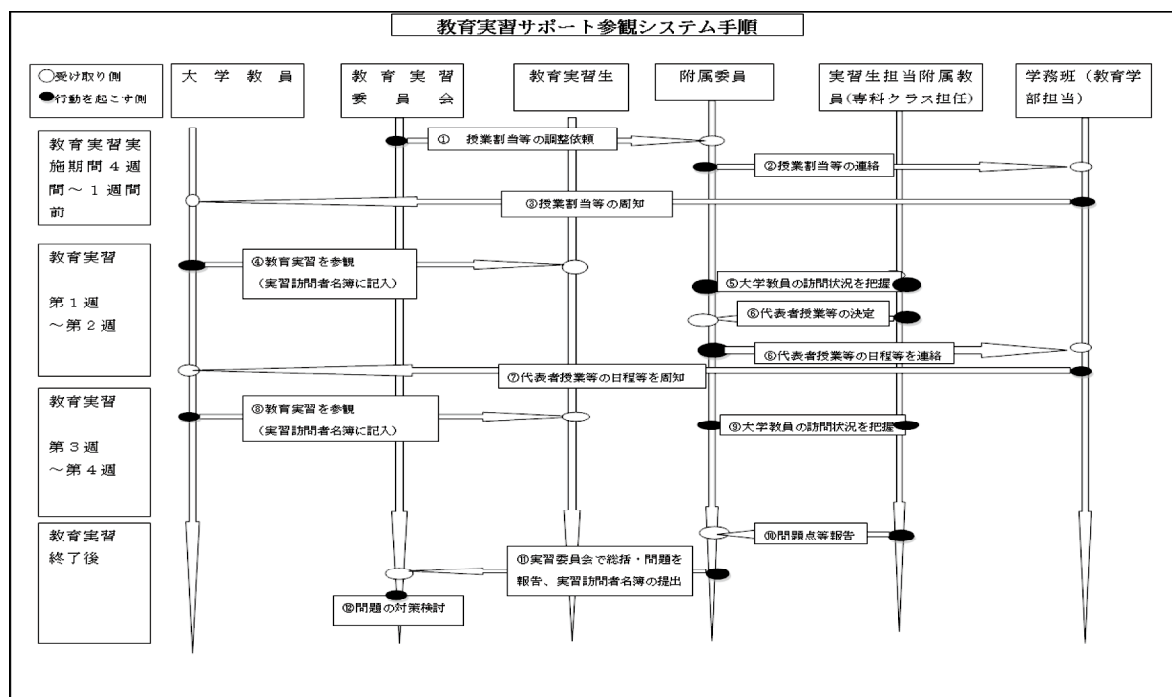


図2 教育実習サポート参観システム手順

2. 方法

調査方法 学生に対しては、教育実習前に体調等のアンケート調査を実施した。
実習校に対しては、教育実習後にメンター室の利用回数の報告や実習校への聞き取りなどから、体調面や精神面など授業外での対応を要した学生についての聴き取りを行った。

調査時期 20xx 年 7 月～11 月

教育実習期間は、9 月の第 1 周目からの 4 週間であった。

体調等のアンケートは実習前の 7 月に実施した。

メンターの利用回数及び、実習校への聴き取りは
実習終了後に行った。

調査対象 N 小学校実習生 129 名（男子 40 名，女子 89 名）

質問項目は、以下の通りである。

1. 食欲がない
2. 吐き気・胸やけ・腹痛がある
3. 考えがまとまらない
4. 首筋や肩がこる
5. 動機や脈が気になる
6. 頭痛がする
7. 体がだるい
8. めまいや立ちくらみがする
9. わけもなく下痢や便秘がしやすい
10. 気疲れする

その他、持病等で気になる点やその対処法などがあれば
記入してください。

体調等のアンケートにおいて、回答及び欠損なくデータとして回収できたものは、
126 名（男子 38 名，女子 88 名）であった。

3. 結果

アンケート10項目のうち、チェックの入った項目ごとの人数と、メンター利用等の内訳について表1に示す。

表1 体調等のアンケート結果とメンター利用等の内訳①

チェックの入った項目数	人数	実習校での聴き取り (人)	メンター利用 (人)	聴き取りとメンターで挙げられた学生数
0	30	3	3	1
1	20	1	1	1
2	17	4	2	2
3	19	3	2	1
4	16	3	1	1
5	7	0	1	0
6	6	2	1	0
7	7	1	1	1
8	5	1	1	0
9	2	2	2	2
10	0	0	0	0

体調等のアンケートで10項目のうち5項目以上にチェックが入った学生は27名であった。続いて、チェックの入った項目数を0～1、2～4、5～6、7項目以上の4つに分類し、それぞれの内訳について表2に示す。

表2 体調等のアンケート結果とメンター利用等の内訳②

項目数	人数	実習校での聴き取り	メンター記録	両方	記述なし
0～1項目	50	4	4	2	44
2～4項目	52	10	5	4	41
5～6項目	13	2	2	0	9
7項目以上	14	4	4	3	9

体調等のアンケートのチェックが、0項目から4項目の範囲であった学生は、メンターの利用や実習校への聴き取りの中でも記録が見られなかった者が全体の約7割から8割を占めるが、7項目以上にチェックのあった学生では約4割

の学生がメンター室の利用や実習校教員による何らかの気づきや配慮がなされたことが示された。

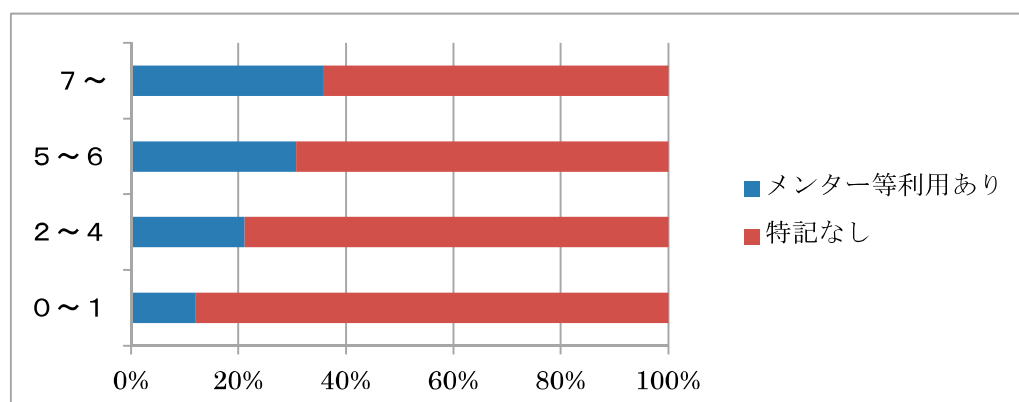


図4 チェック項目数別のメンター等の利用の割合

図4に示すように、チェック項目が多いほどメンター利用の割合が高くなっている。なお、調査期間中の教育実習において、体調不良等で実習を中断した学生は2名、カウンセリング等の支援を行いつつ実習を継続した学生は5名であった。

そのうち、チェック項目数が0～1項目であった学生が2名、7項目以上であった学生が5名であった。表2に示すように、チェックが7項目以上の学生は全体で14名であり、その内の1名は中断、その他の4名が支援を受けつつの実習継続という結果となった。

体調等のアンケートの回答結果に関し、主因子法・プロマックス回転により因子分析を行った(表3)。

固有値の減衰状況、解釈のしやすさ等を考慮し、2因子解が採用された。第1因子は、「2. 吐き気・胸やけ・腹痛がある」「7. 体がだるい」「5. 動悸や脈が気になる」などの項目から構成されたため、「身体的訴え」と命名した。第2因子は、「10. 気疲れがする」と「考えがまとまらない」から構成されたため、「心理的訴え」と命名した。

表3 体調等のアンケートの因子分析結果
(主因子法、プロマックス回転)

項 目	因子1	因子2
第1因子 身体的訴え		
2 吐き気・胸やけ・腹痛がある	.72	.02
7 体がだるい	.52	.33
5 動悸や脈が気になる	.50	-.18
1 食欲がない	.47	.10
6 頭痛がする	.45	.12
8 めまいや立ちくらみがする	.45	.08
第2因子 心理的訴え		
10 気疲れする	.03	.84
3 考えがまとまらない	-.14	.76

メンター利用を従属変数、2つの因子を説明変数とする全変数法による重回帰分析を行った結果、第1因子がメンター記録と正に関連することが見出された(標準偏回帰係数=0.31, $p<.01$)。

しかし、先ほど述べた実習を中断した学生2名と、支援を行いつつ実習を継続した学生5名にあてはめると、次のような結果となった(表4)。

表4 実習中に対応を要した学生のチェック数の内訳

実習を中断した学生	5項目中1項目該当	1名
	5項目中2項目該当	1名
支援を行いつつ実習を継続した学生	5項目中0項目該当	1名
	5項目中2項目該当	1名
	5項目中3項目該当	1名
	5項目中4項目該当	2名
	5項目中5項目該当	1名

4. 考察

結果から、事前のアンケートのチェック項目が多いほどメンター利用が多い傾向が見られた。このことから、事前アンケートを実施し、本人の要望をもとに、結果を実習校の先生方に知らせるといふことには一定の効果があると思われる。

また、アンケートの項目からは2因子が抽出され、それぞれ第1因子は「身体的訴え」、第2因子は「精神的訴え」と命名した。それらを説明変数、メンター利用を目的変数とする重回帰分析を行った結果、第1因子「身体的訴え」がメンター利用と正に関連することが見出された。このことから、事前に体調等のアンケートにおいて身体的訴えを多くする学生ほど、実習中に問題が生じやすい傾向が

見られた。ただし、これらは実習を中断した学生にはあてはまらなかった。あてはまらなかった要因としては、中断時期が早く、メンター利用を図る前に中断を決定していたこともあることが考えられる。また、それだけ周囲からの援助を得にくい精神状態となっていることも考えられるため、やはり援助を得やすくする仕組みや、その年度に実習を行うかどうかの検討も学生本人と共に行う必要があるのではないかと考える。ただし、これには課題もある。1つには、本学部を卒業するためには教育実習が必修であるということである。必修であるならば、できるだけ早くできるだけスムーズに実習を終えたいと願うことが自然であろう。そのため、心身面の不調を自覚していても、敢えて実習に向かう学生も少なくない。そうした中、この実習前の体調等のアンケートは数年続けられているが、昨年度や今年度は比較的スムーズに実習を終えることができたという声が学部内からも実習校からも挙げられていた。もちろんこれには、事前学習や教育実習サポート参観システムの運用の効果もあると思われる。しかし、事前アンケートを実施することで学生自身は自分の体調等を振り返り、それを表現する機会が与えられ、実習校の先生方はその情報を得ることで実習生の現状把握の一助とすることで、問題を未然に防ぐあるいは早期に対応し解決を図るという予防的・開発的な取り組みとなっていることが示唆される。

ただし、質問項目の内容や項目数に関しては、今後も検討が必要であることが今回の調査から明らかとなった。まず、簡便さの観点から、現在の質問項目の数を10項目としているが、第1因子が7項目、第2因子が2項目見出された。さらに、実際に実習を中断するあるいは中断が危ぶまれるような問題が生じた学生に関して調査を行うと、チェック項目数が10項目中7項目以上の学生と0～1項目の学生とに分かれていた。アンケートは学生の自己申告であり、「よく見られたい」「心配をかけたくない」あるいは「自分の状態を知られたくない」という学生は、なかなか記入しづらいであろう。質問紙法の限界と言えばそれまでではあるかもしれないが、それでも学生の円滑な教育実習のためのサポートを考える上では、表現しづらい部分をどのようにくみ取るかも大きな課題となると考える。実習前後の学生自身の意見を聴く機会を設けるなどして、更なる質問項目の充実を図りたい。

5. 今後の課題

これまで述べてきたように、実習前の体調等のアンケートは、実習をサポートする上で一定の成果があると思われるが、同時に課題も見えてきた。事前アンケートだけでは見えない学生の現状や課題をどのように把握し、学生自身の円滑な実習体験へとつなげていくかの検討が必要となろう。

学生の状況をより良くつかみ、教育実習を円滑にするための取り組みを今後も

行い、事前学習や教育実習サポート参観システムと同様に、効果的な教育実習サポートシステムの一助としたい。

参考文献

- 大野木裕明、宮川充司（1996）；教育実習不安の構造と変化，
教育心理学研究，vol. 44，No.4 pp. 454-462
- 坂田成輝，音山若穂，古屋健（1999）；教育実習生のストレスに関する一研究
教育心理学研究 vol. 47 No.3 pp. 335-345
- 姫野完治（2003）；教育実習の実態に関する基礎的研究
秋田大学教育文化学部実践研究紀要 pp. 89-99
- 尾崎啓子（2007）；教育実習体験に関する基礎的研究—面接調査の結果から—
埼玉大学紀要，教育学学部，56（1）pp. 119-129
- 尾崎啓子（2010）；教育実習に臨む学生の支援強化に向けた実態調査（続）
埼玉大学紀要，教育学学部，59（1）pp. 93-104